

## 救いと罪の定め順序-I

神よ、私たちすべてに恵みの時があることを感謝いたします。天国へ至る道を明らかに悟り、時には地獄へ至るその過程を悟り、天国への道の重要性を強調し、地獄へ至る生き方の恐ろしさを警告し、伝道する者となれますように。天国の希望を持って歩めますように。私たちの行いではなく、神がどのような恵みを備えてくださったかを悟り、その道に従うわたしたちとならせてください。イエス様の御名によって祈ります。アーメン。

まず、この大きな地図（図表）の見方を説明します。一番上に三角形があります。この三角形は三位なる神を表す一つの印です。宗教改革の時からこの印が使われてきました。一つの三角形の中は、一つの本質を意味します。一つの本質、すなわち神となる一つの本質は一つです。この本質の中に三位がおられます。この「位」という言葉は、実はラテン語でペルソナ「persona」と訳されます。英語ではパーソン「person」と訳されます。ですから一人の方です。お一人である神の中に三位がおられ、その各位は区別されます。その区別は、私たちの救いのために働かれる神を表します。

さて、この三角形から始まり、向かって左のラインは救われる民のラインです。向かって右のラインは、罪に定められる者のラインです。ここに番号が一つずつ振られています。ご覧の通り、1番、2番、3番と番号が振られています。この過程で救われる民のナンバーを見ると、全てで24番です。そして最終的には死を通して天国に至ります。しかし、この救われる過程における最も重要な核心は、12番にあります。この12番が救いの時点に該当します。

「Conversion point」とも呼ばれます。救われる民のラインです。

さて、では地獄に行くことになる罪に定められるラインも、やはり24番で構成されています。そして、決定的に彼が救いの恵みを持たない証拠は、12番に現れます。そしてついに24番に至り、結局死を通して地獄に落ちます。

この地図は徹底的に伝道的です。伝道目的で実はこの絵を描きま

したが、読み方があります。一番左端にあるボックスです。まず救いの順序に至る項目を読みながら、あなたの心を調べてください。もしこれらのことが自分自身から発見できるなら、あなたは神の民です。しかし該当事項がないなら、恐れる心で反対側を読んでください。反対側に該当するということは、命の道ではなく死へと導かれる道に立っていることを意味します。ならば、このポイントで私は地獄に行くのか。そのような目的ではありません。このまま生活して行けば地獄に行くのだな、ですから神の前に祈ることになれるのです。「現在私が地獄に行く人生であるから、私に救いの恵みを与えてください。」と祈れるようにする目的なのです。まるで使徒の働き 2 章 37 節にあるものと同じです。ペテロの説教を聞いて罪の自覚が起こり、「私はどうすれば救いを得られるでしょうか。救いの恵みを私に与えてください。」そのような祈りの目的、伝道の目的がここにあります。

しかし一方で、右側のボックスをご覧になると、このラインにいる者たちには永遠の命がありません。神様は彼らを見捨て、結局死ぬように放っておかれます。この内容は 12 番までです。12 番までは、依然として神の恵みによって悔い改められる機会があります。しかし、13 番からはその心が頑なになり、その悪しき道から抜けられないし、立ち返ろうとしないのです。ですから、13 番からある内容は警告です。それで神の審判があることを確証するものです。私たちは両方を学び、一つ一つ調べてみる必要があります。その魂をキリストに導きこうとする伝道的熱望のためです。

それでは本題に入り、この三角形から始めましょう。キリスト教は三位一体の教理です。三位一体の教理は他のどの宗教にもありません。イスラム教では御子を信じません。聖霊を信じません。ただ父なる神のみを考えていて、モーセの律法を持っていますが、三位なる神を信じません。ユダヤ教も信じません。御父、ヤハウエの神のみを信じます。また、エホバの証人も同様です。セブンスデー・アドベンチストも同様です。モルモン教も同様です。

したがって、三位一体という教理そのものが真の信仰であるか否

かを決定づけることになりますが、三位一体の教理は、人間的な理性では理解できない教理なのです。では、どのようにして理解できるかということ、三位なる神のそれぞれの位がなさる働きを通して知ることができます。聖書を一つ一つゆっくり調べていくことにします。

マタイ 28 章 18-20 節です。18 節にイエス様の御名が現れ、記録されています。「天と地のすべての権威がわたしに与えられた。」とあります。御父が御子に与えられたのです。ですから御父も「Lord」となり、御子も「Lord」となります。特に詩篇には「Lord」と記されている箇所がありますが、英語聖書を見ると「Lord」と訳されている箇所は主、すなわちヤハウェを指します。この称号が御子に与えられたのです。

ですから今、18 節で父がわたしに与えたとあり、19 節を見ると「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。父、子、聖霊の名によってバプテスマを授けよ」とあります。皆さん、ここでも順序に注意が必要です。父が最初に現れ、次に子が現れ、次に聖霊が現れました。さて、それでは三位一体の位がそれぞれ言及されていますが、19 節をもう一度見ると「三位の御名によってバプテスマを授けよ」とあります。三位なる神の御業によって救いが起こされるということです。ですから、その救われる民を教会の会員とさせるためにバプテスマを授けよ、ということです。ここでの核心ポイントは、三位なる神が救いを成し遂げられる時、各位がなさる内容があるということです。

再び 20 節を見ると「わたしがあなたがたに」とあります。「わたし」とはイエス様であり、「あなたがた」とは弟子たちのことです。「すべてのことを守るように命じなさい。」とあります。洗礼を受ける者は、教えを受けなければならないということです。さて、弟子たちがこれらのことを行う時、20 節後半を見ると「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいます。」とあります。ここで「わたし」はイエス様です。つまりイエス様の働きが示されており、初臨（初めて来られた時）、再臨（再び来られる時）、初

臨と再臨の間は教会でイエス様が働き、救いの民が続けて起こされるということです。

さて、次に使徒の働き 2 章に進んでみましょう。今、私たちは三位なる神の働きについて確かめています。使徒 2 章 35-36 節です。35 節を見ると、「あなたはわたしの右の座に着いていなさい。」とあります。「あなた」とはイエス様です。「わたしの右の座」の「わたし」とは父です。しかし 34 節を見ると、「主は私の主に言われた」とあります。この「主」が 2 回出ますが、前の「主」は旧約にある通り、「Lord」、主、ヤハウェです。次にある「私の主」はここにあるようにイエス様です。では、33 節を見ると遡っています。神は父なる神であり、右の手でイエスを高められたとあります。さて、聖霊を父から受けて教会に注がれます。皆さん、順序はこうなります。主がイエス・キリストを通して聖霊を教会に与えられたのです。ですから、三位なる神が救いの民を続けて起こすことを示しています。三位なる神が共に同時に働いておられます。先ほどマタイの福音書 28 章では、父、子、聖霊と記されています。

では、コリント人への第二の手紙 13 章 13 節を見てみましょう。あるいは 14 節にある聖書もあります。順序をよく見てください。「主イエス・キリストの恵み」が先に出てきます。父ではありません。イエス様が一番最初に出てきます。次に「神の愛」である父が出てきました。次に「聖霊の交わり」が出ています。さあ、順序が変わっています。御子を中心に構成されています。この部分は、父と子と聖霊が同等であることを示しています。なされる働きにおいて同等で、ただ働きについては秩序があるのです。

それでは、エペソ 4 章を見てみましょう。3 節をご覧ください。「平和の絆で結ばれて、御霊の一致を熱心に保ちなさい。」聖霊様が 1 番目に出てきました。5 節では、「主はひとつ」、イエス様が 2 番目に出てきました。6 節では、「すべてのものの上にあり、そしてすべてのものの父なる神はひとつです」。父が最後に出てきま

した。改めて強調します。三位なる神に順位があるわけではなく、高い神・中間の神・低い神がいるわけでもありません。三位なる神は同等な神ですが、なさる働きによって区別されるのです。そのなさる働きは、神のそれを「経営」と呼びます。英語では「Economy」という言葉を使います。まるで経済を運営するように、三位なる神が経綸を通してなさるのです。

さて、ペテロの手紙第一 1 章 2 節のこの箇所でも、父、子、聖霊に注意を向けなければなりません。なさる働きによって区別されるのです。1 番目ですが、「父なる神の予知に従い」、御父がまず現れました。なぜなら、予知に従って、先々にご存じである父の選びのことです。選びという働きは御父に固有の働きです。さて、その節の続きを見ると、聖霊の聖めについて書かれています。次に、イエス・キリストの血の注ぎかけについて書かれています。

ここで、皆さんは「救済史 (Redemptive History)」という言葉の思い浮かべる必要があります。贖いの歴史と言います。神が実際に歴史の中でどのように働いておられるのか。働かれる経綸とは何か。

御父が選んだ民のために贖いの御業を成し遂げるため、イエス・キリストがこの地に来られて、人間の体を着て血を流されました。ですから、キリストの血の注ぎが 2 番目です。これは歴史的な順序で起こったことです。次に、先ほど使徒 2 章で見たように、御父が聖霊を遣わし、御子が聖霊を御父から受けて遣わしました。キリストの尊い血は 2000 年前に注がれましたが、この血が今日、現在に効力を発揮するのは、聖霊の働きによって、今、現在に起こるのです。

さて、ペテロの手紙 1 章 2 節、もう一度順序を見てみましょう。神である父の予知に従い、選びがあり、選ばれた民に救いが起こされるためには、キリストの血の注ぎかけがあり、実際にキリストの血を信じられるようにすること、そして信じることは聖霊による聖めによってです。聖霊様が 3 番目です。聖霊が実際に私たちの靈魂の上に働いてくださることで、ここに「従う」と記されていますが、

従うことは信仰の別の表現です。真の信仰は従うことから生まれるため、ここに「信仰」と書くこともできますが、従うという単語を用いて本当の信仰が起きたことを示しています。

さて、皆さん、三角形で父と子と聖霊となっているのは、このような三位なる神の秩序ある救いの働きのためです。その三位の神の贖い史を最もよく説明している書は、ヨハネの福音書です。ヨハネの福音書は、伝道する際に最適な書です。どのように学ぶべきでしょうか。日本のような場合、多くの偽りの偶像が蔓延しています。誤った宗教があまりにも多いのです。皆さん、どのように伝道すべきかと言えば、ヨハネの福音書だけを持って、一緒に聖書を読む、そのような伝道をなされれば良いです。

一つ例を挙げてみます。ヨハネ 17 章です。伝道と聖書勉強の方法です。他の教材は必要ありません。聖書さえあれば十分です。ヨハネの福音書 17 章 1 節です。「イエスはこれらのことを話してから、目を天に向けて言われた。『父よ、時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すために。』」ここで御父と御子を区別させています。ヨハネ 17 章では、御父と御子が繰り返し登場します。3 節を見ると、永遠の命とは唯一でまことの神、すなわち父なる神です。その神から遣わされたイエス・キリストを知ることであり、イエス様を知らなければなりません。父と子の関係も知らなければなりません。

この時、伝道はどうかと言えば、父の部分には黒のボールペンで下線を引きます。また日本では三色ボールペンが非常に流行っていますよね。イエスは赤色で引きます。聖霊の部分が出てきますが、ヨハネの福音書 14 章を見てください。ヨハネ 14 章 16 節です。「わたしは」イエスで、赤線で引きます。「父に願ったのです」は父で、黒ペンで引きます。また「父はもうひとりの助け主を」、聖霊様が出てきますので、黄色い線で引きます。さあ、このようにヨハネの福音書を父、子、聖霊とを区別して読むと、イエスを信じなさいと説得するものではありません。本人が神様への関心が大きくなり、その上に聖霊が働けば難しい教理が理解できるようになります。

私の救いのために、父と子と聖霊がこのように働いておられるのか。聖書そのものを読む中で、悔い改めが起こり、信仰が生まれます。もちろん、一度読んだだけで全部ができるものではありません。一度読んで説明し、次に機会があればまた一緒に読んで説明し、その次にまたもう一度読んで説明すると、三位なる神に対して理解が生まれます。どうしてひとりの神なのに三位がおられるのか、といった質問はしなくなります。信じられるからです。

ヨハネの福音書 14 章に「真理の御霊」という言葉があります。26 節をご覧ください。「しかし助け主、すなわち父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は」とあります。また三色ボールペンが必要です。父なる神が父であり、私の名とはイエス様のことです。遣わされる聖霊、ではなぜ遣わすのでしょうか。私があなたがたに話したすべてのことを教えるためです。ではなぜ私の名、イエス様の名で遣わすのでしょうか。イエス様が十字架で亡くなられたからです。ではなぜ父が遣わすのでしょうか。選んだ民だからです。父が選んだ民のために、子が血を流しました。それを実際に信じるためには、聖霊を遣わしたのです。さあ、この原理をヨハネの福音書全体が強調しているので、読み、また読み、さらに読むのです。

皆さん、理性的に説得しようとししないでください。そうすると、抽象的な質問に陥ってしまいます。神の御言葉そのものを読んで、父と子と聖霊がどなたであるかを教えればよいのです。そうすれば結局理解ができます。ヨハネの福音書 16 章 8 節を見ると、その方（聖霊）が来ると、罪について、義について、裁きについて、世を責められるでしょう。聖霊が罪を悟らせて、罪の赦しが必要だと気づかせ、子のもとに行かせ、子のもとに行けば、父に仕えるようになるのです。

さて、この三角形をもう一度見てください。御父が、御子を遣わせて、聖霊を遣わせて救いがありました。さて、三位なる神の働かれる順序はこの順序です。

では、救われた者が神に応答する方法は反対側です。信仰が起こり、信仰があるからキリストのもとに行き、キリストによって父を

賛美することになります。父を礼拝するようになります。ですから人間側ではこのように進みます。三位一体の神はこの方法で働かれます。ヨハネの福音書を読み、説明することで、ああ、イエスを信じる原理はこれか、と悟るのです。

この内容なしに、ただ「イエス様を信じてください」「イエスを信じて天国へ行きなさい」と言うだけでは、それでは三位なる神をすべて伝えたことにはなりません。では、お寺に行くことと教会に行くことの何が違うのか。お寺に行っても神はおり、神社に行っても神はおり、教会に行っても一つの神なのに区別が付きません。

今の日本教会にとって最も重要なことは、この三位なる神をはっきりと示さなければなりません。そうすれば教会にいた人がお寺に行くようなことはなくなり、それでこそ三位なる神を真に正しく仕えるのです。

私が韓国教会で長老に聖書勉強を教えたことがあります。三位なる神の教理を詳しく説明しました。ところがその長老が、私は非常に衝撃を受けたのですが、「初めて聞く話だ」と私に言ったのです。初めて聞くと言うなら、長老はどうやってイエス様を信じるようになったのですか。「信じるなさい」と何度も言われたから、ただ信じる決断をしなさいと言われて、ただそうしただけだ、と。今日、ほとんどの人々がそう信じています。

特に日本のキリスト教は道徳的宗教であり、カール・バルトが非常に高く尊敬されています。バルトにはこの神学がありません。ですから非常に危険な神学です。カール・バルト神学が青山神学校に1920年に入って来ました。この神学が入って来て、次に誰が来たかというところエミール・ブルナーが来て、青山神学校で教えました。その方は後にアメリカへ渡り、神学校教授になりました。この時から日本の神学は哲学的神学へと向かいました。今、この地図の内容は、実際に救いを起こす三位なる神の働きです。これが失われ、哲学へと行ってしまったので、道徳的宗教になってしまったのです。

皆さん、この内容は福音の中の福音です。ローマ人への手紙1章



1 節を見てみましょう。「神の福音のために選り分けられ使徒とされたイエス・キリストの僕パウロ」この福音のために選ばれた者です。この福音のために選り分けられた、ここでイエス・キリストが言及されています。また「神の福音」とあります。御父なる神です。次に4 節を見ると、「聖い御霊によれば」とあります。聖霊です。死者の中から復活し、神の子として、とあります。イエス様です。すなわち私たちの主イエス・キリストです。1 章 1-4 節まで、三位なる神について言及することに重点を置いています。今は福音を説明しているのではありません。三位なる神とその働き自体を説明しているのです。

ローマ 16 章の最後の節を見てみましょう。16 章 25 節です。「私の福音とイエス・キリストの宣教によって」、イエス様の御名が言及されています。26 節「永遠の神の命令に従い」とは父なる神です。「あらゆる国の人々に知らされて、従順させるために」皆さん、先ほど私が「信仰」と「従順」を同義語として使うと申しました。この箇所がその証拠です。時には「信仰」と言わず「従順」という単語を使うのは、偽りの信仰には従順が伴わないからです。ですから「信仰」という単語を使わず、「従順」という単語を用いました。

さて、25 節と 26 節には父、子、聖霊が言及されています。しかし、使徒パウロがこのように締めくくろうとすると、何か物足りなさを感じます。再び 27 節で、知恵に富む唯一の神、父なる神を再び言及するのです。イエス・キリストによって、イエス様に再び言及します。さて、なぜ私がローマ 1 章 1-4 節で三位なる神に言及し、ローマ 16 章の最後に 25-27 節で再び言及したのでしょうか。。使徒パウロは、始まりも三位なる神、終わりも三位なる神、全てが三位なる神に栄光を帰したのです。御子だけが血を流して救われるのではありません。父なる神の計画があって、聖霊を遣わして、その聖霊の働きによって信仰が生じて、またその御子によって使徒の職分も受けるのです。しかし、それは父なる神が創造の前から選んだ計画があって、救いと使命を考えるなら三位なる神がすべて言及されるのです。

再びローマ 1 章 5 節です。ここで重要な単語が出てきます。「このキリストによって私たちは恵みと使徒の務めを受けました。」前にある恵みは、救いの恵みです。次に使徒の務めがあります。救いの恵みと役職は同時に与えられるのです。今日の日本の教会の牧会者の皆様、本当に神の恵みによって出会えたことを神に栄光を帰します。あなたの職務は救いの恵みと同時に与えられました。

ですからコリント人への第一の手紙 9 章を見ると、「もし私がこの職務担えなければ、神の前に捨てられるのではないかと自分は恐れる」とあります。なぜなら同時に与えられたからです。

再びローマ 1 章 5 節です。その前の 5 節を見ると、「このキリストによって」、その御名のためには、イエス様の御名です。「あらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすためです。」皆さん、信仰と従順は同じものとしてまた出ています。同義語です。信仰だけ話すと偽りの信仰がありますし、従順しない偽りの信仰があるため、信仰と従順はローマ書で繰り返し同時に出てきます。

また、1 章 14 節に、「私はギリシャ人にも、未開人にも、知識のある人にも、知識のない人にも、私は返さなくてはならない負債を負っている」とあります。使徒パウロが救われたのは、三位なる神の恵みによって救われたのです。ならば、三位なる神に負債を負っていると言うべきですが、今、ギリシャ人にも、未開人にも、知識のある人にも、知識のない人にも負債を負っていると述べています。なぜこのような告白をするのでしょうか。1 章 5 節のためです。救いの恵みと職務が同時に与えられたため、ギリシャ人がいなければ使徒パウロが救われる理由がなかったということです。神はギリシャ人を救うために、不可避免的にパウロをまず救われたのです。職務を与えられたのです。

さて、マタイの福音書 28 章 18-19 節に戻ってみると、父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、彼らを信じさせ、従わせ、そのために働きをする、とあります。真に三位なる神の贖いの働きを悟るなら、救いの恵みが自分にあるなら、その三位なる神の栄光のために、

福音を伝えまいとしても伝えずにはられません。特に日本の教会にこれが必要です。皆さん、一人の魂が信じることに焦点を当てなければなりません。一人の牧会者が恵みを受けることに焦点を当てなければなりません。その方が恵みを受ければ、自然とラッパを吹く者となるのです。三位なる神がこれほど素晴らしいなら、もう一人の魂も変えられるでしょう。そうすればその人もラッパを吹くでしょう。そうすればまた一人増えるでしょう。しかし、神様は、日本の教会をどれほど待ち望んでこられたのでしょうか。それなら聖霊を注いでくださるなら、東京プレイヤーセンターのような機関を通して聖霊を注いでくださるなら、それは三位なる神の栄光のために集まって来るのです。今14年目ですが、私が前回も強調したように、改めてこの三位なる神の栄光を現す日本の教会の講壇となるべきであり、また今日のこの図表・地図を見ても、まず最初に三位として始まります。この恵みを私たちが日本の地に、日本の教会に回復させる働きがありますようにと祝福します。